

- 特記すべき医史学的成果なし。
- 8 アントワープ (ベルギー)
Queen Astrid Military Hospital
(アストリッド女王ベルギー軍病院)
In Flanders Fields Museum
(イン・フランダース・フィールズ博物館)
- 9 ヴァレッタ (マルタ)
旧日本海軍戦没者墓地
Malta Maritime Museum
(マルタ海事博物館)
The National Library of Malta
(マルタ国立図書館)
The National War Museum
(国立戦争博物館)
- 10 チヴィタヴェッキア (イタリア)
Policlinico Militare di Roma
(イタリア軍ローマ病院)
Museo di Storia della Medicina, Sapienza
Universita di Roma
(ローマ大学医学史資料館)
- 11 ディブティ (ディブティ)
- 12 モンバサ (ケニア)
- 13 コロンボ (スリランカ)
- 14 マニラ (フィリピン)

何れにおいても特記すべき医史学的成果なし。

艦上レセプションや昼食会などの公式行事を含めて1寄港地あたり72時間という制約の下、航行中は各種検索サイトからも隔離され、出国直前

に横須賀のショッピング・センターで購入できた限りのガイド・ブックとダウンロード式の地図アプリだけを手掛かりに研修先を選び、現地外務省職員や駐在武官の皆々様の御支援を賜りながら、可能な限り施設訪問を詰め込んだつもりであったが、特にスエズ運河以降で病院見学の域を超えることは困難であった。しかし、パール・ハーバー入港からチヴィタヴェッキア出港までの間に、エボラ・ウイルス疾患対策、大量破壊兵器(CBRNE)対策、クリミア戦争での救護体制、四肢喪失兵士のリハビリテーション等々予防医学から治療医学、あるいは基礎・臨床・社会医学の垣根を超えた軍事医学の広大な地平を管見する機会に恵まれ、海軍の医療史を研究テーマに選んだ医史学入門者にとっては大変貴重かつ有益な収穫を得ることができた。

練習艦隊に配属された(未来の「提督」若干名を含む)約750名の健康を預かる練習艦隊医務長として相応の職責を担い、通算4通の死体検案書を作成しながらの長期航海ではあった。が、一社会人大学院生の立場では、寄港地での外食と日没後の外出とを慎むことで、日本国内に居ると同じ程度に安全な食と治安とを確保しながら、日本国内に居ては決して得られない(特に第一次世界大戦の)空気感を持ち帰ることができ、その後の研究に活かすこともできた。後者の立場に限れば、文字通り「渡りに舟」とも称しうる航海であったことは否定できない。

(平成30年5月例会)

書 評

見城悌治 著

『留学生は近代日本で何を学んだのか』

——医療・園芸・デザイン・師範——

「近代日本における留学生受け入れ史」という興味深く、特に東アジアの近代文化交流の源流と

その断絶を含めて、示唆に富む好著が発刊されたので紹介し、少しく書評を加えたい。まず序およ

び七章よりなる章立てを示す。

序 問題の所在

- 第一章 医学薬学分野における留学生たち—千葉医学専門学校・千葉医科大学を事例に
- 第二章 医学薬学を学んだ留学生たちの帰国後の活動
- 第三章 園芸分野における留学生たち—千葉高等園芸学校を事例に
- 第四章 デザイン学分野における留学生たち—東京高等工芸学校など官立四学校を事例に
- 第五章 師範学校への「満州国」留学生たち—千葉師範学校を事例に
- 第六章 辛亥革命と千葉医学専門学校留学生たち
- 第七章 一九二〇～三〇年代における中国留学生の日本見学旅行—千葉医科大学留学生を事例に

渋沢栄一の報徳思想の研究者として知られる著者は、千葉大学留学生センターの「指導相談部門」教員として、またサバティカルを過ごした上海師範大学、上海図書館の資料も用いて本書を上梓した。現代の留学生の相談を仕事としながら本書をまとめられた努力には敬意を表したい。東アジアにおける近代化を最も早く成しとげた日本には、中国を主とする留学生が多数来日し、その後のいわゆる十五年戦争そして敗戦という日本の激動の時代においてもその交流はつづいていた。序の『問題の所在』によれば清国政府が「日本が軍事力などの西欧化に成功したため」として一八九六年に一三名の留学生派遣を始めて以降留学生が増え、一九〇五年、日露戦争に日本が勝利後の読売新聞では清国留学生が八千名を超えていると報道しているという。この多数の留学生受け入れは、日本国内では問題となることもあったようで「留学生取締規則」から一九〇七年の官立学校への清国留学生入学特別枠設定がされ、その後の「五校特約」へとつながる。五校とは第一高等学校（六五名）、東京高等師範学校（二五名）、東京高等工業学校（四〇名）、山口高等商業学校（二五名）、千葉医学専門学校（一〇名）であり、総計一六五

名を給費留学生として清が派遣する制度ができた。一九一二年の中華民国の成立後、中国留学生は西洋とくにアメリカへ向かったものが増えたものの、日本への留学生は日中の国際関係の変化の中で増減しながら、一九三七年の日中戦争開始とされる盧溝橋事件の年においても六千名が在日し、日本の太平洋戦争敗戦時にも、中国人留学生が日本で学び続けていたという。これらの留学生をめぐる研究史の蓄積は厚いようであるが、著者は現在の千葉大学の留学生センターにて仕事をしながら、その前身となった高等教育機関から残る資料に負うとともに、そこにとどまらない視野をもって近代日本の教育史とともに、東アジアにおけるその意味に切り込んでいる。その範囲は、医薬・園芸・デザイン・師範と副題に示されている領域が主となっているが、今後の研究課題を多数あげており、現在の日本への留学生の問題を含めた研究が進められることを期待する。本書の多くの頁が「五校特約」に名をつらねる千葉医学専門学校の留学生、及びその留学生が結成した「中国医薬学会」などの医科・薬科についてさかかっている。辛亥革命時の千葉医学専門学校生の紅十字隊結成による大陸での医療救護活動の記録など興味の尽きない記録が収録されている。そして留学生の帰国後の母国の歴史は辛亥革命による清国の消滅、中華民国の誕生、満州国の成立、そして日中戦争を経ての数年の混乱、中華人民共和国の成立、その後も東アジアの激動の中心にある。政治史としての日中関係は近代に限っても不明なことが多い。この時代に日本留学を経験した人物は、魯迅、黄興、蒋介石、周恩来、郭沫若、等多数に上る。それぞれの人物の史的評価は日本近現代史でも今後の研究課題であろう。

本書各章のもととなった論文は主に『国際教育』（千葉大学国際教育センター発行）において発表されていたものを著者が章立てをしてまとめなおしたものと考えられる。章立てと時系列が異なるなどはそのことからおこっていることであろうが、7章のそれぞれが分野を絞ってまとめられており読了した読者として、今後の研究として次のようなことも含めて発展されることを期待

したい。現在も多くの留学生を受け入れている千葉大学留学生センター・指導相談部門の専任教員としては、多分に今日の日本留学生の母国での状況や日本での問題などを身近に実感できる立場におられることであろうと考える。現代の問題を取り纏めて歴史としてだけでなく、今後の日本の留学生教育に切り込んだ論考を読ませていただきたい。

留学・遊学は近代・現代に限っても一人一人にとっては大変な経験である。母国へ何かを学んで持ち帰る意識は人生の中の一時代として、本人にとり多くは重圧である。一方、母国や留学先の状況を自らはどうすることも出来ない事が多い。そのような中で国際的な智の交流は行われてきて現代の世界がある。開国以後の日本からの留学生が多く欧米を目指してきた。その一方では、アジアからの留学生が日本を目指した歴史の一端を本書は明らかにしてくれた。

医薬学の分野に於ける千葉医学専門学校に始まる留学生受け入れの歴史が大部を占める本書を本雑誌の書評として取り上げた理由でもある。

「五校特約」の一翼として官費留学生の記録が

よく残る千葉大学に於いて行われた仕事であるが、それにとどまらない私費による日本留学生も多数いたことも触れられており、その留学生の研究も深まることを期待したい。くりかえしとなるが留学生という立場は、大変に不安定なものである。それを受け入れる留学生と、その留学生に対応する留学先があり、性善説の成り立つ事を前提とした国際交流である。日本からの欧米への医学分野の留学生の個別研究は多く目にするが、本書のような体系的な研究はあまり目にすることが少ない。

東アジアに於ける近現代日本の留学生受け入れの歴史としてまとめられた著者の研究が大成することを期待したい。本書『留学生は近代日本で何を学んだのか』は「留学生は何を学ぶのか、何を学んだのか」という近現代世界に共通する命題の一部をなすと考える。

(渡部 幹夫)

[日本経済評論社, 〒101-0062 東京都千代田区
神田駿河台1-7-7, TEL. 03 (5577) 7286, 2018年
3月, A5判, 296頁, 3,700円+税]

青木歳幸・大島明秀・W・ミヒェル 編 『天然痘との闘い——九州の種痘——』

嘗て日本人は天然痘と凄まじい闘いを繰り広げ、嘉永2年(1849)に長崎へ到来した牛痘種痘法を驚異的なスピードで全国に伝播させた歴史をもっている。

本書は青木歳幸氏を研究代表者とする文部科学省科学研究助成金・基礎研究(C)「九州地域の種痘伝播と地域医療の近代化に関する基礎的研究」(平成27-29年度)の成果をもとに編集し、刊行されたものである。本研究の先行論文として井上忠「種痘法の傳搬過程—科学文化史の一こま—」(『西南学院大学文学論集』第3巻, 1957年)が挙げられるように思う。以下井上論文と対比させながら研究の軌跡を探ることとする。

本書は序章、総論、各論、終章、あとがきとい

う構成である。総論では種痘の歴史を正しく理解するのに欠かせない事項が5つの観点、即ち天然痘、人痘法の展開、ヨーロッパ人が観た日本における天然痘、牛痘伝来前史、牛痘伝来再考、からまとめられている。

各論では、九州地域の2幕府領・11藩領における種痘が12人の執筆者により分担執筆されている。本書の性質上史料本位の処があるため、論文の切り口は多様である。試みに各論文を次の3つのグループに分けて略述してみたい。それは人伝牛痘苗による種痘普及活動の成否に藩の種痘行政が深く関与していることを意識したものである。第1のグループ：主に藩の種痘行政に係る視点で記述された論文には4編が該当する。佐賀藩